

シカゴ留学体験記

佐藤 清子

私が在学するシカゴ大学のキャンパスは、シカゴ市のハイドパークという地域にあり、ハイドパークはより大きなくくりで言えば、ダウントウンの南側、サウスサイドと呼ばれる場所に位置している。日本の都市でも少々大きさがあれば、その中に地域ごとの特徴が見られるだろうが、アメリカ合衆国の大都市の包有する地域社会の多様性は、日本とは比較にならないものがある。移民国アメリカに住む多様な人々は決して無軌道に混じり合って暮らしているわけではなく、人種的、民族的、そしてそれに深く関わる経済的、その他諸々の境界線に大きく影響されつつ居住しており、特色ある地域社会を形成するのである。アメリカ合衆国で学ぶということは、すなわちある街に一定期間住み、その街の特色を身をもって学ぶということでもある。しかもアメリカの場合、街に関する学習は、自らの身の安全の確保というきわめて現実的な課題に深く関わってくる。他ならぬシカゴのサウスに住むという経験は、私のアメリカ留学体験の中のきわめて大きな一要素であり、アメリカという国に対する私の印象に多大な影響を及ぼしているように思う。

ここで、サウスサイドは一体どういった場所なのかを少々説明しなければならないだろう。サウスサイドは簡単に言ってしまうと、所得の低い人々の住む犯罪多発地帯であり、黒人の多い場所として認識されている。非常

に残念なことではあるが、シカゴのサウスサイドの文脈では、人種の境界線は経済的格差の境界線と多分に一致してしまっている。数字に表れるその差は衝撃的だ。情報源がウィキペディアで申し訳ないが、ハイドパークの人口比は白人、黒人がそれぞれ約44%と38%、アジア系が11%、ヒスパニックが4%程、年間所得の中央値は44000ドル程だそう。ハイドパークはシカゴ大学という私立大学を中心に擁しているため、住民の多くが学生や教職員などの大学関係者で占められ、人種・民族的多様性が近隣の他地域に比べはるかに大きく、また、住民の所得も比較的高い。それに対して、例えば北側の境を接するケンウッドは76%が黒人で、所得中央値は44000ドル、南側のウッドローン94%が黒人で所得中央値は21000ドル、西側のワシントンパークは約98%が黒人で、所得中央値は15000ドル程であるという。ちなみに、ダウントウンの北側、ノースサイドの高級地として知られるリンカーンパークの場合、白人住民が約85%を占め、所得中央値は83000ドルにもなるらしい。こうした人種や民族の違い、経済的な格差は街を歩く人の身なりや顔つき、街並みに反映され、地域ごとの独自性を生み出している。

ハイドパークと近隣地区の間に経済的格差が存在し、貧困は犯罪と結びつくため、ハイドパークに住む、そのほとんどがシカゴの外

からやってきた新入生たちは、まず不用意に地域の境界線を踏み越えないように注意を受ける。例えば、59番通りと60番通りの間は、ミッドウェー・プレザンスという名の、細長い、しかし広大な緑地になっていて、これがハイパークの南の境界線であり、そこから先は隣のウッドローンとなる。シカゴ大学の敷地は現在ミッドウェーの向こう側にまで広がっているため、学生が気をつけなければならない場所は正しくは60番と61番通りの間に並ぶ大学の建物群の向こう側ということになるのだが、59番通りから南側を眺めるとき、目の前の広い空間は、あちら側とこちら側を物理的にだけでなく、心理的に大きく隔てているように思われてならない。もっともこれは、私がミッドウェーの向こう側にはほとんど用事がなく、滅多に行かないからで、60番通り沿いに寮や教室がある人はまた違った感想を持つことだろうと思う。私がこの境界を徒歩で越えたのは2回だけ、1回は63番通りにある教会へ行った際、あとの1回は社会保障の役所に行った際のことである。留学開始後間もない頃、私は社会保障番号の申請・取得のために役所に行く必要があった。キャンパスの徒歩圏内には一つ役所があるのだが、大学がくれた説明書は電車かバスに乗ってダウンタウンに行き、そちらの役所で申請することを勧めていた。最寄りの役所は徒歩圏内ではあってもハイパークの外なのである。あえて逆らう理由もないので私はまずダウンタウンに行って申請したが、それは却下されてしまった。私の社会保障番号取得は制度的には可能なのだが、窓口の係に取得の必要性が薄いと見なされて拒否されたらしい。番号がなければならぬと済んでしまうことはわかっていたが、別の役所に行けば申請が通る場合もあるということを知っていたので、私は天気のいい、明るい日の真っ昼間で

選んで最寄りの役所に歩いて行ってみることにした。実際に行ってみて分かるのは、やはりそこは圧倒的に黒人の街だということである。それはすなわち、私のようなアジア人と一目でわかる外見の者は、即座によそ者、そしておそらく大学関係者であると認識されてしまうだろうということだ。このような形で否応なしに目立ってしまうことは、決してよいことではない。統計の数字はその地域でよくない事態が起こる確率が高いことを示しており、学生は余程の用事がない限りその地域を避け、大学も学生に注意を喚起する。物理的な壁は存在しないにもかかわらず、人はあたかもそこに壁があるかのように行動するのである。

そんなサウスサイドで、合衆国初の黒人大統領となるオバマ氏の選挙戦を見守ったということは、非常に特別な経験だったと思う。オバマ氏はサウスサイドのコミュニティオーガナイザーの経験を持ち、シカゴ大学のロースクールで講師を務め、イリノイ州の上院議員となった。またミシェル夫人はサウスサイドの出身であり、シカゴの法律事務所やシカゴ大学で働いていた。彼らのシカゴの家は大学からも歩ける距離の、ハイパークとケンウッドの境界付近にある。シカゴはもともと民主党が強い土地柄であり、しかも2008年の選挙では黒人のほとんどがオバマを支持したと言われている。また、大学にはリベラルな価値観を持つ民主党支持者が多く集まる傾向がある。こうした諸々の条件が重なり、ハイパークでのオバマ人気は圧倒的だった。近所のドラッグストアでは、候補者の名前が入り、党のシンボルカラーで彩られた様々な選挙グッズが売られていたが、溢れかえるのは民主党関係のものばかり、道を歩いても、民主党支持を表明する青いステッカーやバッジ、看板ばかりが目についた。共和党支持だ

という人たちは、そうした中で居心地悪そうにしていた。なお、選挙後、そのドラッグストアはオバマ大統領グッズで埋め尽くされ、現在でもそうした商品は継続的に並べられている。

選挙戦の期間中は、まるで長いお祭りのようだった。アメリカのような二大政党制の国で、4年に一度の大統領選挙が行われるとなれば盛り上がりがないはずはないが、2008年はその中でも特別だったのではないだろうか。8年間の共和党ブッシュ政権が終盤を迎える中、アメリカは未だにイラク、アフガニスタンに派兵を続けており、折からの経済危機は直接的に国民生活に影響を与え始めていた。また、オバマ対クリントンの候補者指名合戦、無名だったペイリンの突然の副大統領候補指名など、次々と目新しい話題が提供され、アメリカの人々は、刻々ともたらされる（しばしばどうということのない）新情報や、彼らの中での批判の応酬を、人気のリアリティー番組以上に楽しんでいたのではないかと思う。オバマが勝利すれば、奴隷制と人種差別の歴史を引きずるアメリカにとってはまさしく画期的な事態であり、それもまた話題の大きな一部を為していた。大統領・副大統領候補同士の直接討論会は中でも特に重要なイベントである。寮には早くから日時を知らせる張り紙が出され、私たちは食堂にある大きなテレビの前に集まり、皆で討論を鑑賞した。

お祭り騒ぎの頂点はもちろん選挙当日である。昼間のうちから、皆の話題は結果発表後のオバマの演説会のチケットがとれたかどうかということだった。私はチケットを取り損ねたものの、興奮に満ちた空気に押され、騒ぎに参加するべく夜から友人たちとダウンタウンに向かった。驚いたことに、演説会場であるグラントパークの隣のミレニアムパークには、いくつもの巨大スクリーンが運び入れ

られており、私たち同様、グラントパークには入れない人たちが既に大勢集まってテレビを見つめ、一つ、また一つと確定する各州の選挙結果を見守っていた。その場には恐らく共和党支持者はほとんどいなかったのではないかと思う。オバマの優勢が伝えられる度に歓声が、劣勢の度にため息が湧きあがった。オバマの最終的な勝利が決まった瞬間のどよめきを聞いたときに感じた、アメリカ合衆国の歴史的な瞬間に立ち会ったのだという感動は筆舌に尽くしがたい。いざ帰宅の段になると、公園を出るだけでも一苦労の人混みである。街の中心部の車の交通は遮断されており、私たちは他の大勢の人たちと一緒に、広い車道の真ん中を駆に向かって歩いていった。その場の誰もが満足げな表情で、それはまるでオバマの勝利のためのパレードのように見えた。途中、私は人混みの中でうっかり人にぶつかってしまったが、私の謝罪に対し、相手の女性は笑いながら、「そんなこといいのよ、だって私たちは勝ったんだから」と答えた。この場の雰囲気をよく表した言葉だったと思う。

私のように、豊かになった後の日本しか知らなかった者にとって、サウスサイドに住むのは決して楽なことではない。ハイドパークは比較的治安が良いとは言え、特に夜間は日本とは比較にならない注意と緊張が必要とされる。ここでは物乞いをする人々に会うのは日常の一部である。彼らは何もしないと分かっている、声をかけられれば不測の事態を警戒してしまう。そうした状況に大分慣れてきた今でも、私はことある毎に、安全上の不安に関する文句ばかり言っている。しかしその一方で、サウスサイドに住んだことで学ぶことができたことは確かにあったと思う。今回の選挙に対する私の印象は、他の場所、例えば白人中心の高級地に住んでいたとした

ら異なるものになっていたことだろう。一人の黒人大統領が誕生したところで、アメリカ合衆国の人種問題や、それに伴う経済格差等の問題が一夜で解決するわけではないのは当たり前だ。過大とも言える期待の中就任したオバマ大統領は、一年後の2010年1月現在、山積する課題と支持率の低下に悩まされている。私に複雑な政治の世界を語る資格はないが、しかし、長い差別の歴史を背負いながらも黒人大統領を誕生させたアメリカ合衆国は、少なくともその一点において確かに、オバマの選挙戦の標語であった、希望と変化の兆しを示しているように思えるのである。